和州梁

佐之部

十

津田文庫
文庫1
1604
11

早稲田大学圖書館藏書

洞津　谷川士清　纂

佐の部

さ　嵯端は婥多くいりさ敢はさ敢はは是なりさひはもはは
川のさは同し佛足石歌所載のもさはもはいはもはと見て口語のさ敢といふる婥
字治拾遺ふも見てう○狭とうむはせハ反さく○小も狭ま之同し○
弟彔集る然の字をあり云ふ反さく字書にも然ハ語の婥と又如是く
とゑゆさうさは云さらハさはもをはは脇婥是なり○語事にさやけ
さはひしさわひしさるとうゑを事情容躰を弥まる婥といふ○
真をさといふ古事記にさをを男孫を化作り○物語にさをわふ
ふ云ふはさふをふるふさとかるなと見てふる八颯は字音といふいう
小の云そをくいふる同さ加へし今ふとふあり○ふ月弦さとむハ
神代紀にゑゆ弄槌をさびてとむ是なりさ苗さ少女さびらさはは
びるさみぐるなど皆同し○をとさ愛いふ同韻通く日本紀に一説

010190596422

とひとゝ一發再發を紀ときゝ万葉集より投矢となる
さとよめり又そやあさそやハ征箭ニ○猿とよむハさるぬ略猿島
猿投の郡名なり○あゆさゝるゆくさかくるさいづさいるさぬさ
ゝ海ぬ略なり東奥西肥の方ゝ國名人名ゆゝさとよつけていふ
△さあ　人を率ゐ誘ふいふあハさの轉し
さあと　万葉集ゆゝ見ちさし今もまさとといふ
△さいぐさ　日本紀ゆ福草と書る万葉集ゆ延喜式ゆ朱草ぬ名とし瑞草と
書ゆ三枝とよめハ誤刻せし歟延喜式ゆ朱草ぬ名とし瑞草と
といふ倭名抄ゆ葛とよみ枝く相値葉ゝ相當也とゝく姓氏録ゆ三莖
乃草ぬ名といふ○古事記ゆ如三枝押歯坐といふ詞ゆ押歯ハ押葉
ゆ同しき歟万葉集ゆ三つ並ひあるゆや○万葉集ゆゝ苗ぬ中ゆゝ
んといふも三つあるゆゑぬゆハ必ず中ゆるゆゑゆかくつけこと○古今
集ぬ序ゆゝ紀くとぬ三葉四花ゆまちまちぼうせりといふもみつぬ枝詞ゆ
用ゐるなるべし○倭名抄ゆ薺苨ゝきくゝ一ゆ云ぬ

三ぬ枝ゝ同し○呂氏春秋ゆも三葉薺とゝゆ○神祇令ゆ
三枝祭義解ゆ謂率川社祭也以三枝華飾酒罇祭故曰三枝也とゝゆ見
ゝゆりもなるべしゆゆハ一本ぬ三の枝ひとしく分て莖ぬ朱ゆ
祭ぬ初ゆ出るとゝ見ぬかの福草ゆ擬せしならんゆゆりぬかの
名をさるとゝふ○古事記ゆ吉事記ゆとゝるゆゝゆ音通ひて其祭
ぬ日ぬ三ゆりぬ咲ぬ歟ゝくかなるべしとゝ○万葉集ゆ檜
ゝ高木なるに撰ゝ用ゐるまてゝさいゝゆゆ歟ゝ紀くとゝふゆ
えとり古今集ぬ序ゆ歌つとりゆ移て彼ゆべし弘船抗ゆ三枝
ゝかくすゆゆゝ也彼草末葉廣ゆ歟ハ祝ひゆゆすとゝいふもいかゝと見侍
ふ○延喜式雑藥ぬ條ゆ茵艸牛膝各七斤とゝゆ尔雅ゆ茵芝郭註ゆ
一年三花為瑞草也とゝゆ
さいぐり　神樂歌ゆさいぐりゆ衣すらんとゝゆ梁塵抄ゆ初萩也とい
色り一説ゆ幸萩也ゆめてゝゆとゝり日本紀ゆ蓁摺御衣あり万葉集ゆも
真榛ゆてすまる衣といふ伝文揩ぬ説ゆゝるゆや○沼波貫ゆ左井八利

よ仮ふかれるをいう○茅の芽なり芽を切りて芽を拾きり
茅りうつるやうなる萩の花を萩の花の霧あかう行く秋
なりとうつるなりといふなり
さいはひ　幸福を訓せり幸を助字に用ひ俗語にもあるなり
なり字彙に非所當得而得與不可免而免皆曰幸とあり又書牘に用ひて
形容辭とする前延喜式に佛足石に所々にさいはひに作る祝詞にさきくへ
とも茅の芽にさきくさきくふともあり今も蒙古にいふ者もさいはひ
ふとあり幸也と注す○仁明紀に載効肝蠻之應とあり蜀都賦に景福
肝蠻而興作註に肝蠻言福如蟲群起也とあり○中古にはさいはひ
なりとあるは日本紀に幸之とめをとめるをとめ○僥倖とあるをさいはひ
いう○幸の字は筑前に幸といふ雲に伊勢にいふは再拜也とそ
さいはひ　小山田に本朝之風四度拜神謂之兩段再拜本是再拜也而為
異三寶及人庶四度拜之仍称兩段也とあり古事記に大汨下王四
拜白之とあるは勅使に對せし也戰國策に嬰蛇行匍伏四拜自跪

而謝とあり○職原句解に中世麾と紙に造りうと再拜とい
ふは祝詞禊修(ハラヘ)に始めに四度拜に再拜と云とあり麻(サヽ)
あけそまのたまをしらまのありれはしらとそ麾(サヽ)名とする小紙なりこい
麾りさしと本朝に軍將戰勝を祈るに半古今を例にして米幣
なるはれは米布は幣なりとそなり後令敏始め伊豆に流し長紀して石
橋山に陣に祈りし時に人頼隆白幣と上(ウヘ)箭に付て御(アト)後にさふらひ
しを流とをへしとそへ音を寸実朝は麾とは其制見まり麾はぐろと
呼なるも別制なるの如ぬへし○さいをねは竹の葉に似て花
亦の如は幣は如し唐天蘭とをいふ○再拜は橋は伊勢にいふ元長百首
に伊勢の橋といふ稲本川の事なり
さいごて　倭名抄に戲射とあり小射楯とふるは郭璞方言注に平題
者今之戲射箭也とあり
さいるひ　源氏河海に罪字をあり災難は音なるは呵責は云
又新撰字鏡に讃とあるひとあるは云義なへし

さいもん　祭文也朝野群載に中臣祭文と見えて古語拾遺に中臣禊詞とあるは同義なるべし延喜式には六月晦大祓と書せり○浄るりの類をいふは古を似せたるものの名也よて説経となるといへり

さいとり　弾丸をよめるは謬也黏竿に刺捕の義也今さいとりさしといふは鳥をさしてとりざるとりさしなどいふなり

さいつごろ　前頃の義つは休め字也東鑑に近曽字をよめり

さいつぶま　唯草といふも又いてどり也ともいへり莪撰式にさいつまはぶ草といふはおどろへてと見えて又若詠草時さいつまといふとも見えて細り

さいくしき　源氏にかい抄のさいくしきといへり清々しき義なり

△さう　俗に清濁をさうといふは左右の音也禁秘抄に不及左右と見えて相とさうなく物と見えたり○源氏にさうなもなしといふは草の音假名といへるなり○宣命草などいふは草案也○さうするからかみなどいふはされ音を以てさうといふは志の反然為の義也○然諸の辞にいふはさうなるなりあるなう也○吉凶に就ていふは相の音也源氏にやまとさうとよめす

あるは日本にも伝ありしにや藤原仲直なる者を人といへり相人といひ史記に相工と見ゆ

さうか　源氏に見ゆ唱哥也といへり今さうがとよめり神楽抄に唱哥の詞は百済の国の語也といへり的の歌見えたり○早歌の義ともいへり徒然草職人歌合などに見えたり神楽の声をうたふをおせといへり

さうがう　書法にいふは草頭也或は草勾と書り○草藁は下書也○草敷は足利家の時正月五日兵法の基業として両陣の形勢を作て鼓吹をなし五回旗を揚て互に主客の用をなし挑合て凱旋の体ありしを武家の嘉禮とせるといへりとぞ

さうぞく　装束を物にかくいへり又さうぞきてと見えたりさうぞくしそめたくしなども又さうぞかせとはさうぞくさせたくさなどの伊勢物語の女の装束といふはいとをひき後世男よりも男へも女の装束をおくる事あり

ざうがん　象眼にざうがんうす物と見えて侍中群要に下襲象眼と見ゆうすものは名なりといへり古今著聞集にふるき蔵のざうがんの又ふるきより

乃ざうがあるいつるもをかへし○刀劔ハ異なるにいつ藏嵌ハ字なへし
又鑲眼ありともいつり

さうしみ　源氏ものゝ正身の青鳥なりと云ふり　古事記ニ其神之正身
身とあるを三代實錄ニ正身固爭不兼伏と見てさう明律ニも見ゆ

さうぞめく　紫式部日記ニ上らう中らうれかとそのまゝひきいり
さうぞめきて出ると見てさうと見を山田ハそゝづゝ給へて一向ニ

△さえ　才をかくいふ音を略して列とするの例と象徴に
おけつゝ出さる所のそれさえを使ひのてゝ奥あるしかりうり

○茅茨集ニ采をさえといふも同し後名抄ニハさいといつり
さえ冴　茅茨集ニ風或ハ霜雪ニよりて寒ク冷れ字又冴字とかゝり
ものゝとさえつるといふ是を用ニハ茅茨集ニ朗字亮字とかゝりをよりも
同し○氣分れさえ冴といふも朗亮れ義し
さえぐ　小枝ニ行ものゝて藻注茅ニ行をさえぐ茅といふと見さう

○平家盛の死期ニ到りて枝をうし笛をもかく為けり盛衰記ニも
為れふくるまをさえ冴ルハ為くとも云りさえと南都正倉院の所藏の
小枝笛ハ長ニ小枝三ツあり

△さを　竿　櫓　棹　字なをとあり釣竿舟棹れ船ニ小尾の義如為し
和名鈔ニ榜をゝみ童蒙頌韻ニ擢をさゝ櫂をさすとゝあり○長沙ニさを
を筑也といつり○からうすのさを杵ハ雄嘴ニ○茅茨集ニ人魂れ佐青
ものといつりさを引ハあの音こもりさハ小の義今まさをといふ見さり
源氏ものもらいさをとゝ見てくとゝ見さう○榮華ニ竿れ同あり
さをり　彩撰宮鏡ニ堺をゝあり又うさをりともゝて曲岸ニ注さり
さをゝめ　小苗少女れ義なるへし西土ニ挿秧婦といふ戴九靈詩ニ青袱
蒙頭作野妝とあるを彩猿樂記ニハ五月男女ともに是ハ神代記ニ夫婦
とあるを式とゝめとかゝるとあるを夫と妻とゝ見てゝ○本草ニ菖蒲
さをゝめ　棹姫ものと半り書と同る神とゝ見て小青姫れ義なるへし
さをひめ　棹姫ものと半り書と同る神とゝ見て小青姫れ義なるへし

心服せいなるべし○同京まてハ地英を初く称せり○伊はまより内ハ細ハ
て捕る者多くもいふまを奪ひ河奪りといふ
さてをの　日本紀ハ牡鹿をよめりさハ添ていふ辞なれ又やめる河なる
うや古事記ハ真男鹿と書り新撰集ハ佐小牡鹿とも狭尾牡鹿と
をなて牡鹿の二字をとりてをのとよめり
さてをの　竹取物語ハ去彼年(サヌルトシ)ハ新なるへし　全浙兵制ハ後
年を譯をハ非なり
さてをのくる波　擲投之間也といふ筋を投られ新撰集ハ投筋を
なく波さとも読めりとも此り考法のうりやとをを吟ふるなり
△さう　坂ハ逆なり登降須路あるをを新撰字鏡ハ坂もよめり○
神代紀ハ解をさうとよめハさうと河し○賢をもむハさうし此略なり○
日本紀ハ冠をよめり鶏ハ此り是も坂の義加へし今も鶏冠ををさう
と云り○解をさうとよめる日本紀ハ石積と書く新撰集ハ石積と書
をさうとよめり百石をさうと注せり解石を河し用ゐて石ハ青をあくとも

よめハさうと物用をるなるべし積をさうとよむも音なり朝野群載ハ第
百坂四十坂といふも解の義○尺をさうとよむも青をて訓とするなり朱
雀をもすさうとよむををしてと古事記ハ出て十坂(ソハカリ)ハ新撰ハ曾波
反さうハ加利の略なり
さが　日本紀祥字善字性字を訓せり直ををぐとよみ清ををぐと
よめるも皆なををり祥善清直ハ皆性の活なるなり○源氏ハ世をぐ紀
堺物語ハさぐとん紀ハ又さぐと源ををぐと新撰字鏡ハ性
を指ていふなりさをハ茅法紀ハ瑕字をさぐとよめるハ僻也生をつさう
いふさを氣をを方をもいふ
すさを也○嵯峨ハ山城高野紀ハ嵯峨ハ海辺ハ海ををよめ
堺帝ハ皇子源清御ををり秋篠御門とも書くへし
さうひ　境堺をいふ坂合ハ新撰ハ境部を坂合部とも云せり
さうをひめをもいふ新撰集ハ三中ををさうひをとよめハ石ををハ甲
斐信濃駿河三国をかををいふなりををとハみなををとをみて真中ハ新也を

いへり堺ハ畍と同字とす○浩々りなとやさかひなといふハ然る堺にをつめたる辞なるへし○近江と山城の境逢坂より西三十三ヶ國東三十三ヶ國の堺なりといへり

さがし　険をいふ坂より出たる也童蒙頌韻に巃嵸をよみ新撰字鏡に峭嶢峭又嶢峴又崩岃又巀嶭又嵯峨をもよめり穴字青とよて訓とせりや霊異記に岑もよめり

さかり　盛をよめり栄え有の義なるへしさかんとよむハ音便也新撰字鏡にむさかりも人をさかんといふハ盛に離の義を兼るにや○霊異記に丁をもよめり神代紀に勃也もよめり

さがみ　相模ハさかハさかりの轄みハも此轄也相楽をさがらとよむと同し又坂見の義にて足柄箱根より見下せる國なれハといへり又牟佐上れむを略たるもむさしをむさへていふともいへりお揖川ハ今此馬乳川也といへり○神代紀に豁然とよめり小嚼此義なるへし

さかる　万葉集に離字放字日本紀に疎字なとをよめり裂の義なる歟

く也○浩に猶或の遊牝をさかりといふ又霊異記に欲此義なるへし○霊異記に暑をさかりてとよめりくちなはさかりハさかり此義也

さかゆ　榮字蓬字等をよめり式に榮井(サカ)を福井ともかけりさかゆハ咲と同しきなるにや又幸(サキ)の此義なるへし古事記にさきとさかえを万葉集りさかゆるとよめるもあり栄え杉浦にさかえ段さん万代まてにともよめあり○痘家にいふ酒湯此義也

さかし　日本紀に賢字明達字等をよめりさかしびとをさかしきひとゝて師字をも訓せり栄と義を同しかるへし又黠をよめるハ慧也と浮せり霊異記に儒をさかしきともよめり

さかき　日本紀に賢木坂樹等をよめり又茂賢樹とも見えたり万葉集にもり栄木の義といへり○万葉集に神木をよめるハ神事に用ゆる木を貴ふよりいひしなるへし後世榊字をも造り出たり新撰字鏡に梍字をよめるも二ツ合の倭字也説文に榑桑神木日所出也と見え榑桑ハ即扶桑にして我邦の人扶桑を本号とするも同じなるへし○倭名鈔に龍眼木を訓し新撰字鏡

同し又杜をも訓せるハ誤れり日本紀に外此木ハ皆漢名を填られたるを混
本に称す以注あるへきにて或ハさかゆく常盤木の惣名にて神事に用ひて
一種の木に名くともいへハ龍眼も杜も訓をへたるにやさかきハ古事記に所見なり
然りしか范をさかきとよむもなとあるも賀茂に用ゐし也○神名秘書に與玉社
无寶殿以賢木為神殿也諸神本懐にハ神殿不安御躰唯用賢木となんいへ
り○外宮玉串行事所に一本の賢木ありしてをつけ榊といふ此榊の本にして
宮司ハ玉串を持て東を廻り祢宜ハ玉串を持て西を廻るなとしてめくりさかさと
もいふ又解斎の時勅使宮司祢宜の冠につくる木綿鬘をさして此榊の枝に懸
る也ともいへり○源氏にさかき本にそかゝりといへるハ神の名をいへるなし○伊勢一志郡に
榊原村あり古昔榊を神前に奉りしといふ國の名家にも見えたり湯の温泉
あり古にいふさかきの湯是也榊原なと七栗郡の内にや奇ハ後拾遺集に
見えたり○和名鈔に信濃埴科郡の名に坂城あり今の坂城に彭城をよめり
字史項羽紀に后の彭をさかとよむハ詩傳に彭ハ衛之河上鄭之郊とある是を
堺の意あるへしとて劉氏也といへり一説に彭ハ壁也と注せしをとりて

さかな
者をいへり下酒の物をいふ酒肴の義なるへし魚なるは肴といひ菜蔬を
蔌といふ山肴野蔌なといへり廣韻にハ凡非穀而食者曰肴或作餚通作殽と
見えたれはさかなの義ハ必しも海味に限らさる也禁中の式に三ツ肴すわりてと
いふあるなり○さかな銭をよむと唐山にて過菜といふ○魚舟に列て魚
を買者をしさかなといふハ拒んで食へる者ハ此少のものなれハ向来を祝ふといへり
さかて
新猿楽記に酒直とみえたりそのあてハ杜詩に已辨青銭防顧直集解
に顧以賃船直以沽酒と見ゆ○強人のさかてを乞ふを買路銭といへり
さかづき
倭名鈔に盃盞をよみ或ハ鍾をもよめり大さかづきハ大巨羅とも見ゆ
延喜伊勢物語に酒杯と書り古へより杯に必もち器を用ゐきたり倭名鈔
にも瓦器の部に入られたり今いふかはらけ也漆塗ハ中世以来にや深
会の数見寺に平定衡千載なとに酒宴せし盃にて寺宮にも送りし今の
平皿のことく深く蒔し内外に蒔絵ありしを後拾遺集に
めつらしきひかりさしそふさかつきはもちなからこそ千代もめくらめ
又紫式部日記にも望月をさかつき○さかつきの宴なと

[illegible]は杯の稱そうりのひとつ杯ようかふさうつき

文集は影落杯中五老峰れこそしまつ

[illegible]ひぬるふひぬるふ拾遺うそくまれけつき

文集は醉悲淚灑春杯中とゐてとう○白氏ものゐ引滿巻白爲是之又罍

[illegible]む○十分杯といふハ文子は三皇五帝有勸戒之器名宿巵とゐてとう家

語の侑坐の器とう也とう○紫檀なこと[illegible]て内を浪[illegible]ゐるおれものの

つきとうと卓提といふ○經勢物語は[illegible]とうとゐのハ杯臺也[illegible]生の

名は杯小盤ととう○白氏[illegible]は[illegible]酒れ米し[illegible]

りまづつどうとゐ[illegible]と又樽裡はつがうづきけう

さうかり　優名抄は酬とゐとう醉怒也とゐ酒忠れ器なう新撰字境

りハさうかりとうあり

さうとう　讒とゐとう逆とゐまゐとゐつとゐとゐまゐ菓は賢良とゐ情也とも

將進とゐまゐれハ賢しづとうてゐとゐ今かこづとゐつあしさうもうふ

とゐとうとゐとう名經勢物語は猿は猿とゐめうゐ義訓と今猿かこうと

ふとゐ用うゐ菓は集り

ひるゐなく賢良とすとさけけまぬ人とうく又は猿は[illegible]

○さうしめさうしづちさうしがうさうしぶうまとう婦ハ妻也と云の同し

さうとえ　日本紀の神は[illegible]さうもえゐ菓は集はいやさうとえはとみとう

蜜映の菓ふして菓とさうえとも又とえとうめる此猶あうへし

さうとえ紀　神代紀は剥字をよみ古事紀は逆剥とえとう馬は就ていふ

中は秡は生剥逆剥とあうへいふ獣を生かうは剥と逆は[illegible]は剥ととう

てうあうへし猶は逆だうつけと云めしそ[illegible]式帳は逆剥ゐ生剥は對し

つ[illegible]殺して[illegible]剥とふとう

さうなし　日本紀は悪字は不祥字不良字をゐとうめり無善は[illegible]菓は集は

[illegible]とうめりおとうしさうとゐ小野篁は無悪善は三字をとうゐくふうんと

よみしとゐる小說はうゐ[illegible]

さうやき　右事紀は月額とうとうとうやきの跡青とうゐ今の額は[illegible]

半とえ今ふさうやきうはうしずとも[illegible]今は冠明は[illegible]

代とゝ〳〵ゝ今も其代ゝゝ入る
撰集抄よあさ〳〵くやつまゝゝ傍其近く新を出よけゝとゝゝ其ゝゝ
さやゝよゆめゝとゝゝ冠の半額と半形ゝゝ半形ゝ冠ゝゝ出
法華ゝゝ〳〵ゝ五刑よ及ゝぬ法ゝ罪ハ髮刑ゝゝ髮ゝゝ
ゝゝ和漢ゝゝよ平人の髮ゝゝ半ハゝゝよ西土の辮髮此邦其
其代ゝゝ皆結尾ゝ事紀ゝゝゝゝゝ又慈仁の乱ゝゝゝよ甲冑ゝ竜
ゝゝれハ武士のゝゝや紀ゝゝゝゝゝれゝ半ゝゝゝ海防纂
要よ各倭頂髮開塘外髮稍長ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝハ当常時の風俗ゝ出せゝゝゝゝ
中山傳信録よ剃頂髮留外髮一圍縮小髻於頂之正中ゝゝゝゝゝゝゝ流球
ゝ赤風ゝ同ゝゝ
ゝゝゝ　日本紀よ壽ゝゝゝゝ酒祝の歌ゝゝゝ古事記よ酒樂ゝゝゝ
ゝゝゝ　三代実録よ伊勢太神宮及豊受宮酒立女各二人ゝゝゝ
酒器よ榊葉ゝ結付ゝゝゝ長官よゝゝゝ役也ゝゝゝ延喜年中行事よ三津
乃柏以酒請口奇後柏笏取副立御前一拜自左帰着本座謂之酒立ゝ

ゝゝ
ゝゝゝゝ　延喜造酒司式祭神九座の内大邑刀自小邑刀自ゝゝ今酒ゝ
造る者ゝゝゝゝ八刀自ゝゝゝ杜氏ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
後世事法よ造酒司ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
沙汰ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝ　大嘗祭嘗よハ八重畳ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
一板生絲一両ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
羅草木鳥獸繡縁御坂枕ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
枕ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

いへり○熱田二月の祭に掛舞あり

さきはくさ　拾芥集に人の地のさきはひさきはくさ世をいのるうたがあく悪

さきしらこと　紫式部日記には地のさきはひさきはくなるといへり

さき　先前をよめり神代紀に鋒をよむも同し鋒端をもいふ

又崎をよめり○幸又福をよむも先に字によれり○日本紀に碕字岬字

を訓せり先の意なり今人崎字を用ゐる此も伊勢氏も崎只有崎嶇之

義而不見洲嵜之義といへり彩発字鏡には碕を唐のやうにさきとよめり日

本紀の延をもよめりせば反さく延は與宰通迫之狭こといへり

さきく　神代紀に行矣又當平安又當無恙なと訓せり皆送行の辞

なり幸来の義なるへし

さきたま　倭名鈔に幸魂をさきたまとよめり日本紀にハ

さきみたまとよめり今此幸魂人の心我忖度之をさきたまといふ

なり操幸魂此義なるへし○万葉集に

さきさく海の津に綱る船の風をまつ事を綴せり

卜部兼邦

さきもり　防人をよめり崎守の義

紫の海の濱くをまもるなりし名なるべしよてさきもりと

いへり軍防令に兵士守邊者名防人とみえたり東の武士をさ

きもりといへり○又兵士上番者向京一年向防三年とみえて又向京者名衛

士とあり○東國の京都大番役事可抽誠勲之由有其沙汰とみえ兼久

記に日本國の侍とも昔ハ三年の大番とて一期の大事とし郎従眷属

をしたてて是を晴としてよそほひしかとも力をつくして自から

美を尽し故殿のあはれませおはして三年を六月

につめられて支配せられしとみえて頼朝の時より役まりたる也

さきちやう　徒然草に正月打ちさきちやうを真言院より神泉苑へ出

て焼わぐるなり法成寺の池にこそとさぬなり神泉苑の池をいふなりと

いふかなるは三毬打なるへし季吟説に昔しは毬打三をたてゝ祝ひけり
今は爆竹の竹三本をたてゝ是を用ゆるも其義也とぞ一説にさぎちやうとは
吉書を今門戸にたてし松竹標縄等を焼は是を神泉に用ゆ
焼かちやうといふにつゝ混しけるし西土の爆竹とも似て異也といふは
爆竹の説に據んには山鬼打の字なるへし歳時記に正月一日鶏鳴而起
先於庭前爆竹以避山臊悪鬼とみえ朱子語類に爆杖とも見えたり俗に
とんとの火をとんとといふもさぎちやうとんと我邦は十五日也或は十八日也或は三元張は訛音
なり西土は上元中元下元ともに燈を張設る事あるに據るといふ○十八日
に清涼殿の南庭に於て焼くる其時吉書も添へて陰陽師大夫是を囃
して舞曲もありきと也料家より献せる青葉竹をもてうちかへ扇等を乃
飾りて十二本を十二所に立並へたるなり

△さく　神代紀に擘又裂をよみ霊異記に研又析をよめり小開はゑみなる
事し新撰字鏡に坼をさけめとよみ小開也と注せり○助語にいふはさく也
すゝ欲さく曰さくの類也○花に開字咲字をよめりさきゆくの義なるへし

新撰字鏡に拆破をよめりさてひらくともゑむともいへりさへは草葉をいふ八千
葉やさくら咲は樓子也○神代紀に割をよむは裂に同し○日本紀に狭をよ
めりせばき義也○避をよめり離と同義也○源氏に放をさくといへり
さくや反さくる也○幘も音也御幘は白き絹にて御冠の巾子をゆひめぐらし
に御神事の時也侍武也と三國宝事抄にみえてさり達武帝中得事に
見かきたる也とみえて又片匙のさくともいへり童帝无帙幘之縁とみゆ

△さくり　倭名抄に嘿噎をよめり小兒の哭くへし嘔吐とさくりといふもさ
前へし俗にしやくりといふもしやくり反さくる也○新撰字鏡に歔欷をよめり泣餘の声
也と注せり源氏狭衣猪の物語などにさくりもよゝとなくと云り採集抄に
しやくりもあへずとみゆ今はしやくりあげてなくともいへり○太追抄に
見る網にさくりともいふ大の足なくれ事にといへり

△さくし　物の脆き事にいへり貝原氏の説に鬆字書に髪乱貌といへり土地
軽鬆食品軽鬆木理軽鬆などいふ軽軟にして分決し易き也さく裂は
義にしいへり品字義に俗以為實之對緊之反也とも見えたりとぞ文字

さすらひまゆらへり

さぐじ　三狐神ハみけつの神の借字なるべしと音をそよろしといへり農家祭り
て田神とする是也齋宮神の音にもいふ扶桑略記に延元四年前大和守藤
原成資男三郎仲季於伊勢齋宮邊射殺白霊狐之罪過配流土左國とみえ
たりさやぐじと混ずべからず　白霊狐ハ別に故あり

さくら　櫻をかりてよめり沈休文詩に山櫻發欲然註に果木名朱色如火然
也とみえ　王荊公詩に山櫻抱石映松枝司馬温公詩に紅櫻零落杏花開
とみえたるハ品なるべし神代紀に木花開耶姫ありて伊勢朝熊の神社に櫻
樹を其霊とせし事古記に見えて櫻宮とも称せり朝熊の神名秘
書の苔虫神も櫻大刀自の神体形石に生り苔生(ムシ)るといへり思圓上人文永
十年の記に小朝熊の宮の坤の方隅にそびえたる巖ありて其上に櫻木
ありけるを三丈ばかり此木絶て今なし是櫻大刀自命の神体とみえて
つたへ紀に駿河の淺間も木花開耶姫にて富士に同じ伊勢朝明郡に布自
神社櫻神社おなび甲斐国の金櫻神社もまた此神を祭るといへり

開耶の稱せるなりといへり或ハ咲簇(サキムラガ)の約言とするも反くし花木の中にも
開きて見るべきハ櫻に及ものなしよりて世にいふ花といへバ櫻
の事とも成れり貴之云り
櫻よりまさる花なき花なれハいふべし草木ハ梅なと称へり
清少納言も枕草子にかきそへ物して櫻をとるといひ宋景濂も恐是趙昌所難畫と
まり西土無此種といへるも西土にて桜のなきといへり拾遺集に
日本にさける櫻の色を見ハよその國まで人もなげくらんとぞよめる
○櫻花ハ香なしされども清香蓮に似るもあり○左近の櫻ハ一本なるを
よし此紀中に見えたり○壒嚢記に昔櫻町の中納言成範といへるありて
殊さき嘆きて櫻の為に泰山府君の祭を行ハせしに其の花の名
うちえたり延し齢の櫻ハ時をもてよとぞいふ源の櫻ハ
但州城田の市田に圍二丈ばかりの桜櫻あり○櫻實神社宇陀郡佐倉村
にあり式の板なる實を寶に作るハあやまり○さくら島薩摩にあり鹿児島よ
向ひて近年山上に火をえ出せり大隅の櫻島に拾遺集にみゆさくら山ハ

備後の人にて南朝の初勤王の人也 茲後より小原為時の時に揖田貞臣より
さくさめ　匡房卿の説には婦といへり 定家卿の説には早草女にて早苗
少女なとの称なとみえたり 夫木集に
今さんといひしおりを今そ待にけぬへし さくさめのとし
貞徳の説に出雲の国造公事にて上京の時に詠ける 稲田姫の古事を
思ひくれぬ さくさめのとをやさちになれやさに栄ゆとなれ
夫木の哥ハ此とに哥とせらるや戸の家なるを刀自にとひしも也といへり
は神代なるは佐草記に委くみえたり 天淵記にも素盞嗚尊搆八重檽
於佐草里隠女於其中とみえ 出雲風土記に神須佐能袁命御子青幡佐
草壮命とあり 文徳実録にも青幡佐草壮丁命とみえたり 乾野坐哉にハ
熊野佐久佐神とみゆ 延喜式にも同じ書たる説撰にハ佐草丁年
とありともさく 按するにてそ文徳嚢抄に刀自をさくさめとよめ
るも説撰集にも見えたり 今佐草村ありそれも八重垣あり
さくさり　源氏にさくさりおもすけさるとみえたり 細流に貧しく流し

ともくさえしといひて小扶の義なりや
さくなぐり　祝詞に出入の口より狭くなぐり小ト（下）し隔ふとみえたり 狭
長なる義之一説なりくみ及ひ逆垂之といへり
さくらがり　近江国に何ぶ沙袚の名ありて七瀬の沙袚の一つなり
拾玉集に
御祓するやさくらか谷より落る瀬もなほくらき世の細代木
續後日記にハさくなぐさともみえたり 神名式に粟鹿郡佐久奈度神社と
みえて文徳実録にも以近江国散久難度神列明神とみえたり 按にハ戸の義
なるへしと申 沙袚によく合ひたれは名つけたるにや 又此名も
ありける袚戸の神も祭れるにやあるを真途といふなりし乃胡録によりて奇なり
樓花の語とも称せり
さくしろ　古事記に五十鈴の枕詞にいへり 為章説にさくしろとも
よみてあり 折釧乃義なるへし 五十串といふ串あれは五十鈴と属けしるや
又折釧の義ともみゆ 折たる釧の鈴とつけしハ手鈴といふなり 日本紀にハ

析鈴五十鈴なとみえたるより儀式帳にはさくしろともかけり○釧ハ釧ろ

さくらがしハ　山槐記に三尺成饗用櫻膳故實也櫻膳者三方臺丹敷落花其上置食器とみえたり

△さけ　酒をいふハ栄えの義かえ又けく呑ハ笑さかえ楽しむの義也といへり貝原氏曰昔年於長崎聞彼土人之言曰予嘗屢為海賈遊于西番諸國凡中華及諸夷之米穀其味皆淡薄不及于日本所産之甘美故其所釀之酒亦氣味不及于日本然則以日本之秔米豎良醞可為天下第一云今按するに天工開物に南方酒皆糯米所為とみえて稲記に稲謂之大師古粳謂之小師古秈謂之紅絲米釀酒宜用大師古造粉宜用小師古とみえたり稲ハもち種ハうるち秈ハたいとう也陶淵明も酒のためにに稲をおほく植させし西土の秔米酒を釀するに用ゐさせて粳を用ゐし我邦粳にも勝るべき故にも稲の宜き事も後漢書にみえたり蝦夷ハ粟を用ふ蝦夷国の産物也○吉備の酒ハ萬葉集にみゆ産訓にも備後の酒といへり○酒ハ酒香をいふ説ハ法義経の抄に初則人呑酒次則酒呑酒後則酒呑人とみえてより世に酒呑童子といふも此義之呑をてんの音によむなり日本紀にみえたり和名抄に造酒司さけのつかさとあり○雉色立成に鳥をさけと訓せりさけぶの義なるべし○鮭字をよむハ倭名抄に食経を引て文俗用鮭字非也といへり或ハ年魚とも書せり遼陽のよといへり朝鮮にハ鏈魚といふ東醫宝鑑にも妻し裂の義を其肉片々裂やすしといへり○からざけハ漢独書なりとみえてより東大寺の聖宝の賀茂の祭日に乾鮭を太刀にさし牝牛にのりて一條乃大路を渡らるといへる事もあり蝦夷もいとおほし蝦夷の産物なり○東坡志林に僧謂酒為般若湯魚為水梭花雞為鑚籬菜有為不義而文之以美名與此何異とみゆ此方にても鮭を去者とし鮨を剃刀とし鯛を首座とし蛤を獨鈷とし數珠木とす又狸汁鴫焼等此名なり

さけぶ　號叫をよめりさかえよぶの義なるべしかえ又けし霊異記に吶をよみ新撰字鏡に嗷をよめり

さけぶみ　東鑑に去文をよめり所領を他に遣す券書之二条為氏より冷泉為相の許へ指摩の状此名をあるさる時の證文にも去状とかけり

今八月祭礼の神事を云ふ也といふなり

さけのかゝ　延喜式に神服女五十人分左右青摺衣日蔭鬘男女各執酒柏とあるを云ふ柏酒を用ゐて酒をうけうるを云ふ右記にて知ぬべし

器をも同しく呼るなるべし○三祭礼に柏酒の神事行り酒を上るとあり

△さこそ　美名抄物語に然社と書りを家知ぬべし

△さゝぐ　日本紀に戴字を舉字をもかきたり持上る也又捧字をもかきたり

ゆゑも同し霊異記に擎もあり

さゝら　竹籬といふさゝらくとする者を出て名とする歟字をかきたる字書に考得をもて木虎に比せるなるは齟齬をさゝぐして是をもちゐし敬といふ是なり又笏帯をもいふ○信に比さゝらをもちて物を洒せり中撰集抄に

ゑさゝら自然来る所の居士と称し竹籬をすり舞てそ唱演を見今に比さゝらすり社とやゝ又空也の流をくむ者なるもとひさゝらといふなりもち八鉢さゝら八竹籬なて古へ八山をおろす賀し今を瓢さんとすりて可をもとめる茶筅をもとるも竹籬なり紀にもるるや平定盛ら

空也乃聖ら一廉を射て名を羅ひ雑芸深衣比丘とありし法をもてなぐれ狩衣を似る物と指けり○神樂良能小野八美濃集に見ゆ遠里小野比道也とゝ也り右記にさゝらすりさゝら社なり

波海比松浦よりいふ波比事にさゝらあるをもて見てこゝろ比ゆ

古賀記の一説名まて日本紀古事記にもよ大波比あるをもて狭く浪ともなりもゝとなりもゝとなる波比出とも栗林ともゝとも見て藻波とも云り

美濃集に八楽浪とも神樂浪神樂聲浪とも云り神事を小竹葉を用ゐ中古事記に倭名抄に名を楽浪と云ふ海しゝよ

ゆゑ中古事記に出るを拾遺に倭名抄に名を楽浪と云ふ楽浪と父詠天智帝比時に百濟より投化を○満又連満とゝもに美回し詩毛傳に風行水上成文曰漣見ゆ

○合物にさゝなゝといふ白蠟なるべし類書纂要に見ゆ

さゝかり　小蟹比美濃に小戸縣に浦小蟹とゝてさゝり

又信に性躁ぐしきを笑へ也り○さゝがれ蜘蛛といふ小蟹ようく似るなるをもてゝ古今集に見る蜘蛛をさゝがにとぞかりとゝもあり

私記ニさくがよハ恒常ハ此ハ常ハ
ろハ如ハ〇さくがよ雅ハ七夕ハ美名ハ
さくやく　耳語ハ又霊異記ニ唾ハ〇日本紀の歌ニ見ル
言ハ口ハ〇くちあるも同し　天書ハ所ニさくめしめと以ル
呼ハ口ハ吻也ハ口ハ〇さくやこの花ハ奥列白川ハ色
淑ハ〇よ以ル故事ハ〇と以ル
さくへハ　童蒙頌韻ニ支宮ハ〇さくへこと
障ハ気ハ〇柱ハ〇柱ハ杖ハ杖ハ〇さくへこと
洗ハ〇と以ル
さくはなハ　古今集ニさくはなハ海ハ〇倭名抄ニ但馬國氣
多郡ニ樂前ハ〇さくはなハ〇さくはなハ海ハ〇さくはなハ
川ハ〇さくはなハ〇倭名抄大和國高市郡ニ檜前ハ〇ひの
くまハ〇さくはなハ〇さくへハ〇さくへハ〇さくへハ
さくはなハ〇さくはなハ〇さくはなハ〇さくはなハ〇さくはなハ

さくらあこ　倭名抄ニ泊瀬ハ〇唐韻ニ濱ハ〇貝ハ〇ゆ萬葉集
ろさく浪の志賀さくなミ浪ハ〇ありらもまも助詞小浪も同し
さくなミ　日本紀倭名抄ニ砂礫ハ〇砂ハ〇砂礫ハ〇砂ハ〇砂礫ハ〇
さくもあり萬葉集ニ小石ハ〇さくもあり〇さくもあり〇さくもあり
さくり細石ハ〇さくり細石ハ〇さくり細石ハ〇さくり細石ハ〇さくり
ハ〇さくり石ハ〇さくり硬石破磧ハ〇さくり石ハ〇さくり
綾ノ谷村ハ金亀山福王寺の寶物ニ〇さくり石ハ〇さくり石ハ〇さくり
ハ〇さくり大師堂ハ〇さくり大師堂ハ〇さくり大師堂ハ〇さくり
良相公ハ男ハ常行公此ハ〇さくり良相公ハ〇さくり良相公ハ〇さくり
ハ〇さくり三宗小第ハ〇さくり三宗小第ハ〇さくり三宗小第ハ〇さくり
ハ〇さくり家公ハ〇さくり家公ハ〇さくり家公ハ〇さくり家公ハ〇さくり
ハ〇さくり懷中ニ入て〇さくり懷中ニ入て〇さくり懷中ニ入て〇さくり懷中ニ入て

入て雷火せり　そそ還を福島左衛大夫正則ハ斎と名て法名を知ると
俗ハ雷斧せり　性石供ハ京都ト肆ハ支機石ハ如し　其ゝ流蓋小紺之
ひらく　京ハて天帝ハ織ハ石也と　ハり伊勢安流彩ハ
流出兎原伊吉ハ神おハ頂ハ凹ハ石ハ　ハ
ハく　毎も留ハ　毎ハ基ハ　ハ入附ハ自ハ　ハ畜ハ　ハ
禄の法道法紀王

初ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ

さゝらがゝ　日本紀の所ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ

て小車ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ

ハ世小車　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ

ハ　小花錦小伯仙錦ハ　ハ文　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ

ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ

さゝめこと　私語ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ

知七月七日長生殿夜半無人私語時ハ　ハ

さゝらえ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ

小野ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ

ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ

車ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ

△さゝ　度ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ

短ハ器也曲尺ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ

指ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ

ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ

虫ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ

さゝ　茶匙ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ

ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ

ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ

さゝ　延喜式ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ　ハ

もろこしにも指羽のことあり二上山の鷲もうとらむとよめり延式帳に
も紫刺羽一柄菅刺羽一柄なとみえて廣韻にも翳ハ羽葆也とみえたり
長柄の大団扇にて指かくるものなれバさしはといふ成へし○鶺鴒も
萬葉集の歌なるべし鵯をも論に齊人呼て雀鷹といふとみゆ此鷲とよめ
るといへり朝鮮より来る小隼之といへり隋書に海東青とみえたるをも
そこの鷲羽ハ尾のさきすらちかき中也すこしづつ後にわざはさるに
あふり赤きしづく同じ

さしすき　萬葉集に指進とよめり栗栖の枕詞といへり栗刺よりいへ
るなるべし源氏にはしを紀人又むちなり指ひして行りなとみえたり○指
縦字鏡に鐏をさしともよめり策也物語にさしすくるものいへり
事なりとみゆ

さしぬき　指貫と書にあり袴をその括をすそに指つらぬくゆゑなりと
いへり倭名抄に奴袴をさしぬきといふ訓せり又綺狩袴とも見えたり
○主上のめさせらるゝ事ハなき名の時の外ハなし但御鞠の時ハ帳臺の試に

准してめさせらるゝのみ建武年中行事に見えたる文なりしハ女房もさるにめさる
時ハ指貫を見る年ならに多く見えたり西宮記に古時有制臣下不用しと見ゆ
○奴袴をよめるハ雑令に宮戸奴婢三歳以上毎年給衣服の條に冬ハ布襖
袴とみえたるより起れるなや今ハ上皇親王より始めなり指清涼殿にあり
て已につひの制となれりハいはさるもなしとせり○海人藻芥に僧中裘袋
純色下最今着用指貫とみゆ○武家にハ紫の指貫ハかならず用るなと

さしがね　矩なりともいふ吉方の板に刻をつけたる物をそ略して今の曲尺とよめりし
まがりがねと訓せられためハ算法の勾股弦をうつしたるものをさしがねといふ
○六分かねと称する若ハ本をよて遂より勾股弦の矩之

さしうぶ　燈油をつかさ或ハ脂燭を訓せり源氏に紙燭さしてと
とうしとぬすといふなり

さしかへし　源氏に見ゆ花鳥餘情に天盃をうけて其時かはらけを取て天盃
の酒をうつし入て其のちなりそれは空をさしかへしといふとみえたり○源氏
りわしかへりなんといへるハ今返立ちてといふなるべしといへり

さしたること　文なりといふ　ことばの詞なる歟　山帖などもこれなる出なりとぞ　ハ虎を名付たること　本草集に指燒草と書りさしも　やしまといふもの今略して　○俗書に一切衆生を衆例せり　也新京今此ためぢうあれさしたる　説なしとこそすれ　奇ハ貝なきもの　ハそぐさほど此字をかしこへるみ　ほふなりと　招提菴の説なり

△さす　指也今いふゆびさすなり　指指を此如と與を　舉て物を指と　也いふハ文選に率呼直指とあり　指ハ物也とかり　○茅原集に射と　よめり爲をさともいふなり　出るる歟例し　○ものをさすともいふなり　八雲刺とよくいふなりさすも　奇なるあり　○神武紀に的字をよむハ指　的此如し　○刺ハ鍼なるよりいふ　指に同し　綱に刺とふ　綽茅原集に見　俗に縫をいふなり　刺船ハ漁ちに見　○出れさすハ螫也　刺此如新撰字　源に見　○門をさすハ神武紀に閉をあり　鎖の如し茅原集　人此如みてこそくりめぬ　茅に見　ひいてこそん　宿さすなゆ　紀

遊仙窟に今宵莫閉戸憂裡向渠邊とあり　○此れさすも指此如なる歟し　凡て光の映もるをも　いふ　○酒をさすハ酌と　見ゆ　○爲をさすに力指胡籙指　筋指のこと　新撰字記に見ゆ　○茅原集に　かゞ　○茅に一さしなと　いふも指の如なるへし　○彼をさす　目をさすハ點をあり　差此如なり　○蓼此如ものさすこと　○樹をさす本なり　○茅をさす声をさしも　長なるへし　○爲を　さしハ挿と　○樹をさす本なり　折本なりさすハ壓本とこそ　○　力よいふ　挾と古今白指に

なくつこれさやのはくつとひつて　家を力よりて　物なり

七枝刀ハ日本紀に見　○使をさつる子人　見をさすをいふ　差なり

匡謬正俗に科發士馬謂之爲差　官府語　日本紀に差良家子の爲　使着軍防令に凡差兵士　見ゆ　○人をよいふハ　緣名抄に校首　こそこそ新撰字源に　柄もあり　○人をよいふハ　總名抄に校首　りあすをさすこそ　同前　○さすれ棒ハ　棍棒とこそ　○神武紀　さすが　讃嘆此如　さす　勢て本を　見ゆ　此如　行　大　そ　ね　二つ　ゆ　く

いふ稗ちくさ〜字書に併ハ相並也と注せり家集に仰ぎ見るまでもあるべきなり拾遺にいふ注に也よて当時俗語に八稗字とも
先り○世り流石字とさすがとの略なり拾遺に用ゐり流石八音孫楚が石に漱ぎ流に枕ぎといふ故事なり流石ふるく牽合せりと云り○活撰集
みちのくへまかりける人に先らちとつかまつりける男之
わくらはにて焼失れ煙りにいぶされたる為ハ為ハさすがに勝刀く燧と附たること日本武尊の故事に剃刀に照る
為へし○能れ名所にもさすがとの行り○為ハ為とさすがとの人云ハ為とを
ひさぎとひ餘をとひさぎといふれ拾遺にすがれをこの源氏
りたること歌にもまたそれをいまさらまぎれなりこれこそ
伊勢物語にみさをひさぎと書れ字を結り
さすがに　日本紀に假廐をこれあり注に兵庫に置く字書
り廐所以藏食物とあり源氏物語にこれを今按ずに
狭席なるべし

さまえ　俗名鈔に樋をこれ先り挿柄れ器似斗と注せり又屈木為之
といふ古今につまげ物あり盃ともこれ今也蒔れ民家にも
物を酒器にすこれり
さすがに　家集に先り俗名鈔に跳あを訓し又これをべとも云り
上有鐶といハ今いふ弦巻れ拾遺にこれ流ありて注にこれ
りの新撰字鏡に鍋又鍋をこれあり
さすらけ　家集に手竹の事にもこれ
もいハ竹れ蔕とこれ注にこれ同しきもつ流にハ雲に行と
家集に天雲判とも天ハ刺竹ハ立竹にて神代紀に新植とこれ
家に省きこれ注に御寺に手竹れ蔕つけさせき
刺竹田の図にもこれ拾遺に刺竹も枝葉れこれ
さすらこ　枝首岐れ家人家の枝首にこれ今これ等ハ枝に似る

形り長脚鎖といふ

さすがみ　天つ神といふふさがりし神と梵は阿律智と今俗行ひ

みもすそ　ものあかくいふ

さすらふ　中古祓はらはさすらひとあり日本紀は流離流沉伶俜あと

を初せり左遷とあるも是せり中山氏酬酢は漂也

漂ゆくてさすらふ光れるものと今新に寝覚は光るあり

源頭基づけり　衆あつて砌所に眠とる事と枕草子あんと云ふことあり

新撰字鏡は徨とさすらへありくと訓せり今案なり

送りて云ふ　とくとくひ　魂の沸さすらひてけさ云ふなり

○日本紀は待とさそらふとあり先づ家是なるや

△さすらも　さすらも草と是音もそもつ松葉紙はいさもとあり○碁

俊のさすらも嘉と命もとあるハ粗とあめつちを共奇とあり

△さすぞ　領兼する語はいかなりの家と嘸字とくむハ字書に此家はいかに

ものはいふべき事なれども字とあるあるべしとそ後を推量してい

ふ

詞なれはいふ思ひ合せてふもさぞあるとあり字彙は嘸ハ陽應也とい

さそふ　率あふ　率ひいつり率副に新率も誘字とあり同じ今誘ひと云

り　いつり新撰字鏡は倡誘とあり

新撰字鏡は倡誘とあり

△さそ　杜詩集注は以節貯沙去其細而存其大曰沙汰とあるとり祖

非とあつるはいかに流言とあるとあり一説は選叙令集解

は處分與校定同文也とあるとあり詞ハ字あてあるとあり沙汰とあり

推量に字とこいふり○沙汰之限といふ成敗式目は是て理非を沙汰とあ

さ沙汰といふ公ハ不義世に沙汰とあり沙汰人も是とあ

り○俗は点傍に言ふ無沙汰といふり○沙汰浦ハ雲也後碗酬帝に

沙汰とあり　さそひ　訴とあり○式の祝部神社ハ諸尊冊尊と書と

社司に沙汰とあり九州道記は是○唐書沙陀傳は沙陀ハ西突厥別部處

月種也とあり後名拾は沙陀調曲とあり

さだ　松平御は定とあり定氏物語は定とあり

河海ヨ央字ヲ出シ云ハ何ヨリカヒロウモ又ハ或ハ婦人ノ嫁ハ三十第ヲ限ル事ハ三十ヲ過ルヲ云ハ宮ノ名ヲ記テ後ニ万葉集ニ見ヲ出タリ浦ノ名ヲ信ヲ云ハ決定セリ○仁徳ノ皇子ノ貞登ノ名ヲ

さぐし　宮ヲ云ハ然認ノ方ノ認ノ又神代紀ニ坐定ヲ云ヒ

さぐり　日本紀ニ宮ヲ云ハ不貞ヲ云ハ不貞ヲ云ハ

さぐみ　万葉集ニ真ヲ云ハ白氏文集ニ安定二字ヲ云ハ

さぐとも　一説ニ梵語の閑陀伽也ト云ハ○諱ノ字ヲ貞ヲ

さぐめ　倭日本紀ニ賜禄之額ヲ云ハ額ヲ定ヲ額ノ字ヲ

さぐめ　今ノ俗ニ宮ヲ云ハ

さち　神代紀ニ幸ヲ云ハ幸ヲ又利ヲ云ハ又幸利の

二字ヲ云ハ○本文能幸有ト万葉集ニ見ヲ出タリ

さつき　五月ヲ云ハ早苗月也ト云ハ

す　神代紀ニ雷槌ヲ云ハ

さつき　五月ヲ云ハ早苗月也ト云ハ

さつま　薩摩ノ国ノ人ノ名ヲ云ハ

さつを　幸男ノ字薩人ニ同シ神楽ニ

て　ハ法の誤カ

さうや　多聚集に得物矢とあり物部氏の八束剣八束剣訓ちとあり今なほ
ちとやとよむハ湯りなり伊勢風土記に此所を都夜と書とあり
さづく　多聚集に授字をあり真淵の家必へ霊異記に囑もあり
△さて　多聚集に然而とあり而を扨とあり其の家にさりぬるもさてこそとさく
ら多とあり俗に扨とかくハ文手を二合にするに訛りたるし佛も字書に
正家に行すす口語に嗟嘆にさてもくあるかいなくなどもを移語
の詞とすれ共紫芝園漫筆にさてもそれなりとあるを沒て猶中國人
言然後也此七字在倭語則不失其為最頭若譯傀儡詞為華語而以然後
為發首則不成文理矣とあるハ俗語の訛謬を辨へるに沒し
さで　多聚集に足ゆ和名抄に纚とあり三才圖會に投網とあり
小手に多くしまるて魚を捕るを梁塵鈔に小網とあり沒猟集に
多聚集に小網とあり沒猟集に
こもまらるる沈れもとたさすさそのさてやあるなるなるこつへさ
さすとあるに多聚集にあり○同類にまつでなりとあるにあるなり○

さてもとあるハ狭とどもに此さなり
△さと　郷里とあるハ狭處に多くへ一名伊勢物語に京とあるハ日
本紀に本郷○孝徳紀に凡五十戸為里とあるに多聚集に五十戸
里四方あるとあり○こづくへに対して家家とさとあるに物語にあり里第
里亭に称見し○信に婦家と称してさとくあるに源氏にさとくと字典に
妻曰郷里南史我不忍令郷里落他處とあるに○里子に称見しあり
さと　伝後の宮ハ狭門に多也とあり
さとり　神代紀に智又識とあり去取に多とあり荀子に是之謂
之智と見てさとり悟とさとるとあるに同じ彩説宮後に憐もあり
さとす　諭とあり令悟に多さとす日本紀にもあり
さとし　聰とあるハ賢敏の多家へ一説に梵語に薩埵也とあり信
り目聰あるもあり○多聚集に性とあり祥とあり沒に祥吉凶
之先見者とあるにあれさとしに性異とあり人を諭

もの家や源氏ものがたりの
さくらあま　里よりもむ蛍之又源氏ものがたり永久年中より人丸の
影供始行ありて以来影供領として顕季より給りそれより歌を
里蛍れる新と称す
さとがつり　摺烟れ三日より釣婦父舟れ家より五雑組より田
鸞といふくるくるり今の月がつりもいり
△さるゐ　神名式伊勢国多氣郡佐那神社二座名神大社　吉事記より手力雄
命佐奈縣に在と今の力雄命若伎那女命也と云り吉事開化記より曙立
王首伊勢佐那造之祖と云々延式帳に佐奈縣造御代宿禰と云佐
那谷れ内仁田村に社あり○文武紀より遷多氣大神宮于度會郡と云ふ此
神社を拝すべし
さるゐ　秋ものみ早苗と云ども小苗あり中やら苗わり苗ゆ苗なりも
まあり一説りるさるゐれるを略しるるりといふれと不苗
なりへしもいり

さるゐす　古事記の所なるるるるる小海れ家とと云とさハ幾海をすハ海辺
さるゐさ　垂仁紀より鐸をまあり小海れ家鈴澤ともあり神祇令より鈴二
十口佐奈伎二十口と云々こうり式河内大縣郡より鐸比古神社鐸比賣神
社あり一説より澤ぬるとと訓とる○さるゐさぶなくいふ須ハ鈴ひるぬるとり
○鈴鈴ものも布れ名より呼ると張
名ふ　おいさるるるるる浦風れさるゐ家をけしかるん
さるゐぐる　第聚第より皆悪れ家をるあり鈴ぐるれ家なるへしるれ家
ともいふ云道ともより通せり又ものもるへし淵鑒類函より形鈴下同
鸚鵡類精神別禀鳳皇心酉陽雑俎より蓮子湖多蓮花紅緑間明下疑濯
錦れ彩と云り
△さるよい　日本紀より審神者と訓せり古事記より沙庭と云り或ハト庭と
云り延喜式より庭神二座御ト始終日祭之と云々あり西土神論の
うるるり
さふつらゆ　第聚第より云ゆさ繁絡ようらゆハ丹着家れ家ようつゆさもるん

ゆさふつらよ居妹をこめあくいつらハ紀部といふあり又紀氣細なとよつけ
あるハ紀の艶へらもりいふあり
さふぬりれふ　萬葉第十五に狹丹塗れ舟彩色舟紀いふ又さんそかれ
紀將まそそかふ舟よ同しもいふ
△さぬき　讃岐とふむハ音と大和れ地名上總れ地名国幡れ地名ふも
ひろ名も共よ狹賀れ地形とのふくへ一説よ竿れ湖れ氣示竿と
貢せ一事古代拾遺ふ云く神乃御面跡次米と云ふ古事記ふ四國れ事と北
玉藻吉備海ふ云く神乃御面跡次米と云ふ古事記ふ四國れ事と北
面者身一而有面四毎面有名とふくふる見し○濱波ふ云紙又有能斐
者といふの保則傳ふ云ふ○紙貫氏ハ實朝れ臣兵ふ云ふ
△さく　核とふむ小粒れ氣如へ一瓜ふハ瓣とふくふり詩ふハ瓠犀とひさ
ふれさくとふめり實とふむも同し○日本紀ふ主神とかくさくとふあり
保勢物語ふつひさくまろうとさくとふひたれ物語ふ彩名さくなくふ
ふめり○鎧ふさくといふ札し左傳ふ云くふり金小れと弘簡錄ふ金

髮とふくふり○寢とさくとふめふ奇ふ一萬葉集ふさ称ふ云なくふとよ
めふハさ称ふくみし同結し結ふもふ山彩ふ一○諱ふ真誠信ふくとふひも
真實ふさ人字とふむハ人康親王れ諱ふ仁れ氣ふふふ○萬葉集
ふ名ふふさ草枕かくさくふ古ふ紀れ奇ふふ名とハさ称なくいふハさく
反せくふ知れ詞ふり
さ称ふれ称ふ　古語拾遺ふ掘れ古語とふさハ紀氏拓拙れ氣ふ
ふ一新後撰集ふ
さくふてさ本ふひ一殖ふそ君ふふ紀ハのけハふくれ
神代の角とふふり
△さふ　所の名ふあ一神武紀ふ狹野と事と小船と同氣如へ一佐野
乃伝ふハ和氣日抵紀佐野村ふふり○舟橋とふみ一佐野ハ上列言海れ
ふ云ふり恒世ふ嘉蹟ふふりとそ○萬葉集ふさ長くふふる彩もふふる
くふとふめふふ定家ふも引とふめて神ふちふふけもふ一とふあり
こハ紀列也○撰集抄ふ伝流ふ伝説れとふふハ高井郡田沖れ湯

の南又安曇郡大町北小もも依松ありて二流北巻ありて舟を渡す

△さば　神代紀に多とさらとあり田鶴さらと呼なといふ是なり○澤も多北巻蘇澤北を霊異記に溪もあり○奇れ緯よりハさそハ竹器なるへし君さハ今をさハれ敷あり

さバ　時よりハ源氏よりゆさらハの略なといふ○禁祕抄に取花波立箸陪膳取其御箸折出也とあゆた往記に散飯をあり又さんだともいふ度會氏北に豊受大神宮御饌殿北後四に散飯壺に小箱を置朝夕御供北散飯を入ゝそ至尊に八御乾初と称まるもいふ飯食北祖神と称まるあり御飯北さらゝあまがつれらゝげへ北らゝといふ又散花とも八御仮北上の亀足をとれけるゝといふ論語に侍食於君君祭先飯注に祭謂祭先代始為飲食之人とあるゝ一説に生飯とも云て宋音に呼り是ハ浮屠氏の事に佛祖統記に佛為曠野鬼神鬼子等改葉血食而受僧衆出生之食此縁起也とあるあり鬼ゝとゝふハ法ゝり出る物なるへしとゝふ拙蒙抄にかゝるとあれさそ

北外北さゝとゝいふハ緑溪北青也とゝふ○海名抄に鮪とあり小歯北魚他魚に異まりとゝふ又沙に八あをさゝとあゆ鮎北字西土にハあゝ美まり唯崔氏食経北説相似まり南産志に青魚も亦近し貝原氏北説に裏秋溪人取出とゝふ溪大ゝ海に連り紀名目に鮪に鯖北奇に海人北ゝ海に取北里北蛍かゝ那すむ里北海人北ゝ也ゝ

ゝあるゝ如しとゝふゝけよい奇をゝゝゝゝれ仲のやうに評せり一説に海ゝとゝ星夜一天北けしゝ人皆常に多ゝ示ゝて字治滋田をゝゝめゝ川北蛍能宅蛍市ゝ北の溪ゝゝ沿海北ゝ北ゝ北ゝ数ゝゝゝゝあゝゝ海八親しゝくゝゝゝ人ゝゝゝかゝく北ゝしゝく形容しゝゝゝ

を辨へゝゝくゝゝ○雑に八紙布也源義助に足利高氏と戦ひし所に

さゝく　處分とゝふ熟野群我申業試に仍勅事狀謹請處分をゝゝゝ貝

紀略要北浮に區處曰處分別曰分とゝふ梵語北梁溪何を善説とゝふゝゝ

ゝゝ見ゝとゝふゝ又區處とゝゝ清律集解に分別事情曰區決斷其罪曰處

とゝゝ又裁断曰分とゝふ又扱字をゝあり周禮疏に須扱とゝゝ字あり扱取

也といふ　さぐくもといふよかるべし　中山傳信録ニ國中人入テ仕官者其略
識國字者為首長曰按土名山巴帰ト云ヒ〇さぐくもいふ髪ゆい
なり〇蜘蛛大ニさぐくもといふ　ものり繩ぬきて花をもて綱ニつくるなり
といふ　新古拾遺ニ蜘蛛ハさぐくもと云ヒ
さぐくも　酬林字ニもあり　和名抄ニ酒味ヲ云テさかやるといふ　さかー
ものいふ見ヘし〇帰田録ニ凡百十枡以一棋檀置其中則紅熟爛如泥而可
食十人謂之烘枡と云ヒ　〇さかーの祝澁篦ともいふも右の義ニ通ス
さかり　響銅也と云ヒ〇障ヲいふハ障ヲ見ル音ニ通ス　蜘蛛　すかり
ろもや延喜式ニ障神祭ニ用ヒ　萬葉集ニさかりひともあり　ひとあり
日本紀ニ蔽ともあり〇後拾遺ニ指ヲさかりといふも神ヲ祭ルヲ祭ルと
云ヒ　ものヲ隔ル事ヲ云ヒ　風雅集ニ神ニ祭ル神ニ祭ルさかりと云ヒ
ざかり　俗ニざかいといふ　〇とかの袋囊抄ニ名札ヲ座牌といふ云ヒ
座牌ハ版位也見ヘし　如ハ座配ともいふ
さかり　張益といふ沙彌ハ沙羅沙

鍋沙船ハ彩見ヘし　日本紀ニ訕咤とあり　蜘蛛　めくれ　萬葉ニ
さかめく　日本紀ニ訕咤とあり　蜘蛛　めくれ　萬葉ニ
さかりら　松茸紙ニ髮ハ　萬葉ニ　さがとそさがらかニ　源氏ニ髮さがらと
云ヒ　今も髮をさがくと云ヒ　さがらもとも
さかへあと　日本紀ニ蠅聲とも如五月蠅とも出タり　古事記ニハ狭蠅
那須とあり　〇万葉集ニ　蠅成　さわぐ　舎人とも　蠅奈周
さぐ　兒等ともあり　ハ枡詞ニ　河あり
△さび　日本紀ニ鋤字鉏字ヲ　古事記ニ小刀ヲ　小冷ハ　なる
ろへーカをひえとあるハ事神代紀ニ　二字ともすきともあり
〇神代紀ニ蛇之韓鋤といひ　神武紀ニ拔劍入海化為鋤持神ともあり
さび　鋤ハ劍の古名　如へー〇金ヘる具ニ　さびといふもの　職人所含
云ヒ　〇銹ヲ　萬葉ニハ鋤ニ　生する　地ハ　ハ天工開物ニ　焼物　蒙ハ
ものも銹ともいふ　倭名抄ニハ鉄錆ヲ云ヒ　新撰字鏡ニ　鉦ヲ　〇さび
ともあり　集韻ニ　鏽音秀　鉄生衣也　今作銹　正字通ニ　鏡鏽　鏡上緑也　俗

名穉妃姤とみえたり○錆にさびといふハ古事記に勝さび万葉集にも遊べ
さびをとめさびをとこさび神さび翁さびなどいふ是も不樂不怜なれども
あからさまと訓しハ非なりすさびの義進ミ荒ぶる意とみえり又志
る夜さぶり夜びなきバ我に鍍りてそれぬるをさなくしさびたるかな
といふも同し又山さびなみさびもみえたり志みハ志げくもしといへり霊異記に
窈窕をさびとよめりさも同しかるや○さびハさびしと宿字をよめるハ
老宿の意錆より出たる詞なるへしさびたる猿の変化人のさびたるな
といふ是也瑣尾の義とするハ允當ならず全萬葉集に
冬つく日ゝさびまさる草のねもかくしも形くありける其声
○すさびハすさ暗せるさびハ錆なり又旦夕べにさびつゝ紐らんとも見ゆ
さびし　寂寥をいふ閑寂も同し宿字錆字と意を通へり萬葉集に
冷又不樂不怜をよめるハつまらぬかたといふ義にかなへりさるぬ
ことなるもいへり淋をよめるハ霜雪の義ありさやなる義によめるすさぶしとも
いふ是仁紀萬葉集にみえたり

さひつ　字鏡に紫米抄に左筆と見えたり馬具也色葉字類抄に竹皮をさ
ひつと訓せり豹皮に竹豹ありて虎豹ハ林木森々たる地に棲ぬるよりいへり
圖書にも必竹林ありて竹皮と称せるにやさひつハ左筆ハ虎豹の切対
なるへしといへり今按筆或ハ笔に作る是竹毛にりて笔の用をなさすに
て右筆に對して左筆と名けしにや瑩見記にハ左筆虎鞘あり地
文虎皮の文なかりなるを左筆といふとみえてより
△さふ　萬葉集に隣とよめりハ故なる反ふなり
さぶる　万葉集にさぶる子とみえて遊行婦女とよめり能ぶる義ぶる反
びさびに同し萬葉集に神さびを神さぶるともよめり
さぶらふ　侍又伺候字をよめり萬葉集に佐守布と書てさもらふと
よめるハ狹守の義なるへし神代紀狹漏を口訣に候と義をとき物を
ミまもりさもらふハさむらふと書て語にハあたらさるへし○日本紀に候風と
かせさもらふとよめるハ風をうかゞふと同き意と知へし○今の簡牘の結語に
候と書てさぶらふとよめるハ古へ侍ふと書るをさぶらふをもさべ

ふも同じ意なるべし

さぶらひ　侍とも書用ゆ諸家職勤之名也とも云て五位六位の侍をいふ内中の殿に院の下の小面にあるを殿上侍の官也と云り源氏にさぶらひわらはべり童子といふなり

○戸令に侍幾人と給ふとあるは年八十以上及篤疾の者に介抱人を給つるなり中世家れのとゝの見也とのり○殿上をさぶらひといふ事源氏にもとゝり侍所は東雲に侍所別當庭訓に侍所奉書をとゝり○士とも武家人の色称とも推一合十を士といふともとゝり

右平記に以下の平侍武士とゝ今の平士をいふめり

△さへ　助辭に何さへ何とかいふは第系集に副字添字を活用さへの類也とゝ並第若干も同しくゝめりそれらへてもふるれ物なりて副兼るさまもせりとのり又結句に用ゆ事多しとのり○援撰集にふさへるられさるめやはとゝもとよめり

所性一貫の西偏に俗八今も行そなるとゝのり○文選に陟をさへと訓もさへぎるし遮の字に遊禽獣圍陣也とゝり○第系集に禁字とゝめるは障と同し今障に防をさへぎるとゝ

もとさへてすり堅に淤はせるもの也八へとゝのり○物に

庚信の賦に長河一決不可障之以手はさへし○類聚雑要に唐匣と圖して面有佐倍とゝ

さへき　佐伯とゝり音し伯とへさへきとゝもいふ黄蘗とゝもくとゝもいふ

もと服実人のさへきゝ名けし事日記にゝり暦錄に八さけびれもとゝり○さへきの安義佐伯郡に

さへづる　新撰字鏡に嚠又囑をゝみ第系集にさへづるとゝ和名抄に囀とゝり障出に囀多に囀とゝ公治長に囀もゝ鳥八さへりてゝ

人れ物のゝ中ゝ中ゝ中

もろてさるとかあり

△さゝ　紙保ハ大和ノ地名日ノ紙ノ狭穂ノ方正義なるや○さゝ風ノ
ちさゝ世風ノ新あり○さゝぢハ泊瀬ノ新あり○さゝ殿ハ泊瀬公ノ家
なり○紙保殿ハ長屋王也といふ○紙保姫を長屋とし給ふ田姫と
称とするハ京ノ京ノ京ノ時の事し紙保ハ京ノ京ノ京ノ京ノ湯氣とあるる
姫あり玉田ハ楓ノ新まより紙景化ノ及ぶる所なり姫ハ功化と
比して云り

さゝを　ぬきてさゝとあり小乾ノ家なるへし

△さゝ　様字とあり今ハ様ノ字と云ふ何さまにつけても云ふ
○さゝ様と略してさゝとハ様ノ様ノ様ノ家し○神代紀ノ方字とあるも
同一方役ノさゝ○人を召ノ様を召に当る様ハ六康富記ノ様書様と
見て園大暦ノ公方様とあるハ義政将軍ノ付制を法ノ判を押まる
りさゝ様ノ武家様と用ひ申ノ公家様を用ひ申ノ様ノ様ノ様ノ様
用ひ申ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様

りさゝ○ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様
見なり○様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様
眼なるさゝ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様
ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様
さゝ様ノ様　日本紀ノ吟字進退字なるとあり狭迷ノ様ノ様ノ様ノ様
吟とふ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様
新撰字鏡ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様
さゝ様ノ様　様乱ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様
さゝ様ノ様ノ様　亀トノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様
△さゝ　亡佛深切ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様
大神ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様
や様姫世記ノ所謂佐美都比女也
さゝみ　送物ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様
ありといふ一説ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様ノ様

第り沙汰と云せ云て沙八音とかきり云れて雲よれつゝなくず汰
きちをとそてゝるやゝもゝり源氏りゝ風雅と云れみぢまといふゝり

○實明親王代奇り

神代りゝむゝるゝ　神代りゝ

是八さみぢれ乃音ゝよゝ音ゝ緑如へゝ　雅よ初て多ゝ多ゝ伊
勢物語りゝ物語ゝ　ゝ物語ゝ　ゝ伊奨冊りゝんりゝ

物よ配する説ゝ八神代りゝ

△さむ　夢よ覚ゝ酒よ醒ゝ又語韵よ解八夢覚也ゝ

さゝ沙ゝ　ゝ八自滝ゝ

○湯ゝ　ゝ熟ゝ

り蘇ゝ

さむしゝ　延喜式り狭席ゝ　陰席長席ゝ

ゝ八物語ゝ　ゝ

ゝ

△さめ　俗よ衣服ゝ

ゝ三陽氣ゝ

ゝ長ゝ　ゝ此後ゝ

さゝ

○書叙指南よ算ゝ算ゝ　○全術兵制
よ課命士ゝ　ゝ譜ゝ　○杉

筭ゝ西土よ圭埭ゝ

於漢武時ゝ　俗語ゝ事物紀原よ後人以呼萬歳為山呼者其事蓋起

弟代ゝ三笑ゝ

△さめ　鮫魚ゝ　鮫ゝ船又鰹ゝ船延喜式ゝ

狭眼ゝ　ゝ眼ゝ　ゝ細ゝ　ゝ方言ゝ

よ鯊ゝ　ゝ音ゝ　ゝ朝夷ゝ　ゝ水練ゝ

鮫三喉ゝ　ゝ

り鮫二喉ゝ　ゝ

食器を形まるぐ撞木ざめありたるよいかせふさし○刀劔の欄鞘なとり
用ろハ本草音義ょ鮫魚皮装刀欄也とゑ後漢志ょ以白珠鮫為鐔口
之飾とゝ呉都賦の鮫函とさめざやと訓ハ歐陽公ょ魚皮装貼香木鞘
とゝる若し呉物ちょ背上有甲珠文堅弦可以飾刀可以為鐔とゑ
西土ハ刀装も日ゝよひとしゝゝ今も骨角をわろをも用ゆ○移こざめ
ゝ虎賞のゆざめハ胡沙魚也とゝり○倭名抄ょ赦豆常ょり童井氏さ
めれおびとゝあり鮫珠とゝるや○意さめ　ちさめ　いさとれあせるを
さめとゝふょ同し碑ゆさめへし事さめふるもゑとゝり真さめも同し
○拍人ハ枝を伐て方木ょするとさめをとゝり○音伎まそ為とゝめりまさ
めゆさめ村さめハ形ちり又方素集ょ春之雨村之雨成ょり雨及さめ
さめがる　近江輿地志ょり古事記ょ醒居清水とゑて日本紀ょ居醒泉と
ゑて日本武ゑ此泉ゝ水中ょ石ゝり其武ゑ此腰ゝ石とゝふゑる
と撰集抄ょ仲哀大法師義を所此泉と云ゑ誤ゝ為ゝり
さめぐ　更級日記ょ又仲代直指抄ょさめくと注とゝハ啼澤蛙命

ゝりとゝりとゝりされと俗ょあやさめと注とゝいへとさめハ小魚也家ゝ
ゝや砂石集ょさめをゝとゝあるゝくゝゝるゝとゝゝ
△さゝ　然も此家し注ゝ氏ょさゝやとゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ同し
○大双紙ょさゝとある人とゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
さゝふゝゝ　彷彿をあり然も似ゝ此家し髣髴も同し彷拂とゝゝゝ
さゝあらぶあま　遮莫又縱他任他をあり かくあるべきなるあを
さゝもゝてせんかゝあけまふゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
詩家用遮莫字蓋今俗語所謂儘教者是也とゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
なりあるすゝ及まくれとゝ俟考へし　繁芳物語ょ
ありてまゝたる事をまけよけるあるゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
△さゝや　源氏ょさゝやゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
あるさゝけようけるゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
呉季札ゝ於ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
乃ゝやハ鞘し筆ゝさやハ帽し又かゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

筴也狹屋也家〇祇武也佛祇よいやさや爰てとりの八菅豐洲弥多
よ敷也ふとさやと奥す〇萬葉集よ八活とゝめりさゆり此家と古今
集此さやゆも見〜かとゝめりハさや之此家と云り〇絲細をさゝといふと
紗綾此家紗八音し綾八あやは暗しとて物よハさやとゝりし新よさゝん
と稱もるも紗綾此音実八綾機也と云り〇刀此さやハ和名抄よ劍鞘
ちゝめり又室紋ゆもへし新古抄よちりざやかりざやみをざやさげざや
なとゝゝこゝり又万葉集ゆてさやのふとつゞけよ
さやう　日本紀よ寥亮又鏗鏘をゝめり新撰字鏡よ懐恍をさやけし萬
萬よ朗をゝめり又相のさゆりさえやうに此家なるへし萬葉集より
清をさやけしとも云さやうとも云みは日本紀よ潔をさやめてをゝめる皆同し
斎事紀のあるさやけを行業声也と注せり
さやぐり　日本紀よ未平字喧擾字をとゝめりさゝぐに家もして
古事紀よさやぐよ作りげり反ぐし〇さやぐいさやげるしげる反ぐあり
奇よ篠の事此さやぐ事也萬葉よ芦邊なる荻此事ふさやぐ

古事紀此奇事もたくぶさやぐがもとゝめり今さやをといい
ふ説も同家なるへし
さやまさき　度嚢記よ蔓さやを者とも手象相綾よ白鞘巻とも見て流絡
萬よさゝうまさきとも見てさゝう堪曩抄よ質をゝめり古へハ刀此事にて
ゆゝしと今ハ巻物此名とせり此相をさすふハ鞘あるゝ援さゝんさめ
りを結を帯此よりゝて鞘よまるを作りと腰よ挿むをもて名
ふ説ありといり又さやを赤をさゝ者さゝんやりよ出るを名けしまや
△さゆ　泛をいふさえるよ同しえる反ゆ〇白湯といふハさゆとゝる同し
△さゝよ　萬葉集よ小歌と書とゝ者と書ものを歌此義なへしさゝよ
なりさゝよ家此新見なり新ハさゝ綾とも云り〇佐用ハ播磨此荘名
姓よもいふを平紀よ見ゆ
さゝるこ此ぬ乃　和名抄よ貲布をゝめり狭讃此義しゝみハ升字をも
八十縷なるへしと云り赤此新よ今もいくゝのみとふ見し今此布をさゝと
とゝふ音の轉なるし紗紋此事類聚雜要よ細見とをり〇凶服よし

布ちゝ又ハ新羅國史ニ見えたり○按ニ貲布宜作帛布乎ゝ考

さゝのすみびと　神示をうけふ人ハ新ふくふ物をもて祭り名す

みんなり対なるなり

△さら　日本紀和名抄ニ盤をよめり式ニ高盤枚盤片盤鋺形片

盤手洗盤大高盤小高盤粥盤吐盤等なり常ニ皿をよめり皿ハ盤盂ハ皿

称し今いふものハ碟しあるうらけの器後如へ〜淺碟をもて〜うるみ〜

さらと称するハ縁辺碟をもて〜うるかと碟字集韻ニ治皮ことゝて

正字通ニ俗字舊音舌治皮誤ハ也ゝ〜うる○倭名抄ニ疊子をう

ゝ〜ぬりハさらとよめり○三才圖會ニ按するニ沙羅ハ形碟ハ如し

今俗ちさらと並称するハ梵器ハ鉢沙羅ゝいふる如へし其ニ後世

ゝ磁器ニ倣て名づけ漆へし也和ハ皿を屑盤ニ作ハ羅麼ゝて平

皿と称ハことゝなり○更ニ考ふるニハあらと無す新ハ如へし今もいふゝ

よするゝとゝうゝとゝなりむ時ハ古ゝ多あらさるもゝとゝむ時ハ平戸

ゝ多ゝ訓ハ一ゝ多ゝ帰ゝ又愈ハゝ改ゝ更なりと注す○佐

良ハ嶽ハ加賀ニあり

さらけ　本朝式ニ甕字をよめり貞観儀式ニ飾甕若干口をもて日

本紀ニ漢甕と書る見えたり甕ハ字書ニ瓮字ハ新撰字鏡ニ

瓶ハ〜ゝ〜ゝけとよめるも同〜ゝ〜ゝ瓶の字ハ韻書ニ見えす○式ニ陶

甕瓶ハ〜ゝ〜ゝ硯瓶ハ如へ〜ゝ〜ゝて造ると見り○式ニ大甕小甕山甕

大山甕ハ又祭壺瓮臼甕甕ハ甕ハ甕ハ也ハ也ハ甕

倭字ハ〜ゝ〜ゝ○倭ニ〜ゝけ〜ゝ〜ゝけ〜ゝ〜ゝ〜ゝ

を暴露を活義し史記に肆戸と云て こうし　やハ漂工と云
ゆゑ語に ふさらし ハ漂布也
さらバ　独らハ此義にてさらさらハ也　○人に ぶもんとそさらバ
さらばといふも右の義し活撰集り
さらばこふ ふ　ふ　ふ　

○避と神代紀よりあり乃ち[illegible]ずさらぬ不思なと見て順集り
河風さらんかるとみたもよめり○猴猴といふはさるとよみて猿名なる
屋さき獸中に智に勝たる象なるへしさるとも呼事字治拾遺に
見えたり古来猿字をよめるさるとさるに猿は日本にはなき物なり猿と
称するは屋臂猿なる二物を合せ呼るなといふ○猿は血とも見て
朱漆の器をつくひ魚肉を食ふを合佛に供し事亦忌なるよりも
餌を合ふをうるまて奇と孕する[illegible]
とるゆ巫峽三聲見る○豊大閤の時南蠻船漂流して伝に来る
猿は尾の形亀に似たるもし狐に高安南に猿は尾なく猫に似て毛赤う
らなと漂流記に見ゆ阿蘭陀猿も一品也又新渡に[illegible]
ひさく人に指て是を義[illegible]といふ又高ざるは高ざるは○白猿は老
猿にて[illegible]和に[illegible]
書は紙縒にて五百猴猴とはるを今一猿を書くを
猿に[illegible]集り

[illegible]
○さるふ鳥帽子といふ猿に史記に楚人沐猴而冠耳とあるより○はるを
あかるに猿は智者千慮必有一失とて○後醍醐天皇叡山行宮に
時猿集て逆を[illegible]軍衆會合し敵を退けり事は平記にあるより○
猿猴は甲斐に[illegible]○庭訓に猿本名[illegible]といふて○蓬萊後
話に黄山多猿猴春夏採花菓於石窪中醞釀成酒香氣聞数百歩とあるを
[illegible]○戯場に女形を且といふ元曲選に且狙猶之雌
者也性好猿莊子註猫狙喜交猿為牝牡故當場之役謂之狙今訛為且一
名曰猿亦猶屬喜食虎肝脳虎却愛之而輙負於背猿乃取虱虱遺虎首虎乃
死取其肝脳食焉以喩少年愛色者亦如猿然故妓女總称曰猿優人名打
扮美女娼妓亦曰猿とあるより猶猿は同字也狙も猿もさると訓をへ[illegible]
邦に俗妓女を呼て猫とするひとり猿に馬場は猥に國とりかへ[illegible]
ざる　不[illegible]ずし未也同一字彙に不未也と訓を○いろをとふは
[illegible]音也といふ和名抄にむざさをとして訓一下学集りはさうをいふこと

浮ゝり甲斐ばあくうよハぐるゝもいとまり西ゑてハさうけ更流尾池まてハ
ゑうけといふ見も荒れ詩といふかな多爲し○宮嶽ゑてざるといふ
四角ゑ繞てる義なり
さるぐ　厩ゑてるとつなく本ゑとり猿ゑ馬ゑ猿ゑ馬ゑ祈繞ゑゑゑハ郭
璞ゑ注ゑゑ多ゑゑ又猿ゑ馬ゑ名ゑ馬留ゑいふりさるゑ牧馬ゑ猿ノ等ハる
ゑく斃ゑゑいあり河童（カハラ）ハゑく馬ゑゑゑゑゑゑゑゑゑ猿ゑ異ゑゑし
物ゑゑゑゑゑゑゑゑゑ

さるがく　大双紙よりかきさるがくとつかふ同名なり○猿若といふも同名なり
爲一諧身を譯まへ
さるがう　源氏よさるがうがまーく枕冊紙よ入乃比さるがうかいと名くさう
猿樂比喜なり又沼沢牙小勢更も書
△されこれ　されるもの六晒せるを云なとらせ反ものを拾き集よ
片岸比松のうち絵とも比ひーさんひつひよめうまるよう
されどよといふ須八伊勢物語ふもなくさう○萬葉集よ小石とさいとあ
り砂礫比青なるべー
されば　始めもバ比喜萬葉集よ然尓有許曽乙コツとなくさあれバと
そ比喜なり○されどと萬石伊勢物語よ雖然とあり○萬葉集よ夕イ
去者春去者とい家ハタ夕ゆーあれ喜ゆーあれそのあしたあ反さこそて一
而よ春之在者ともてなるされど
されハといふも同一句調よりて萬葉集若夕去者若も後世夕ざれ
ざれなどさを源氏八比へすといふ

△ざうん　鴛鴦梅と花冠論とゆ品字梅と実冠論とゆ一朶數花一花
數實比梅なる故く単重紅白比數梅なるそ比梅なるそめとさくとゆの
鴛鴦桃なり○八房とゆ梅も也一論よ実八と結ふ亦奇ふなり紙中
八梅ふありとそ
△さうぐ　日本紀よ風塵又散散新撰字鏡よ磬又躁又嘈囂とゆみ萬葉集
よ騒騒とゆあり又散和久御民又佐和久兒等とかくさう源氏よさう
がひとゆるも同一がひなどゆ新撰字鏡よ狼をさうがーとゆありハ
去反ひと今もさうがーとゆ又用とさうをみだるとゆあり
さうく　日本紀古事紀よるさうさう騒とゆ比去も今もいふ和あり
△さゐ　古事紀よ山ゆり比茅比名を結草とゆとかくさう大和比狭
井川八比ゆーゆ名をせりとそ比ゆるハさゆり比茅ゆり反いふ比八同韻通
ゆるといふなるべー○式よ大和國城上郡狭井坐大神荒魂神社五座
とかくさうハ大已貴神比ゆ名を寄る地といて古事紀よ名今見鎮狭
井社といふ○万葉集よ狭藍もあり又むぎぬ比さゐく沈とゆ見る

をさめうくれば受ぬなり

をさまるうさ　左右左なり拜舞奉幣よりの後形

榊木を推れさ枝よりうけて左右左ゝをそやゆまろうん

祇園小兵衛は官人は口伝ようこひゃ可ゝとゝたゝうの○左祐高年中

行事よりの和歌を述て高育英中原左右左の辨也神宮右左右の辨之ゝもゝて

ゝう○右左右左を舞といふもの也ゝう

さゐるたつま　藤樹和可武よりの説に高天原といふ顕昭説よ故堀川右府

を後青朽葉をゝをそさゐるづまゝゝすゝとゝいふ又いとゝうゝとゝもいふ

△さゐく　万葉集よりうねれさゐくゝちげゝとゝたゝ又さゐるくゝとゝ

あせりさゐるゝ言なり

△さゐりれおび　万葉集よ狭織之帯とゝたゝうゝ倭文さゐ帯ゝ書ゝ

あれい倭文れ狭織さゐくゝ